

人材力と技術力で電子出版の要望にも対応 エコーインテック(株)

<http://www.echointec.com/>

中国へのアウトソーシングを早くから積極的に押し進めるとともに、こまやかな人材育成と果敢な技術革新で業績を伸ばしてきたエコーインテック株式会社。電子書籍時代の備えも万端という同社の強さの源泉を探る。

取材・文◎編集部

世界の主要IT関連企業が多く集まる中国遼寧省大連市



電子書籍ビジネスでもグローバル化は必要

「中国」といえば、まず思い浮かぶのが「安い労働力」と「巨大な市場」。景気低迷や業績不振を打開する特長と、とばかりに市場が広がる。そのコストメリットやスケールメリットに熱い関心を注いでいる。

日本語の書籍をデジタル形式で読者に提供するという、一見、国内産業的に見える電子書籍ビジネスも、やはりそうした動きと無縁ではない。紙媒体や紙版データのかたちで蓄積されてきた印刷物を電子書籍化するにあたっては、スキミング、文字入力、フォーマット変換、タグ付け、校正、検証といった数多作業

が多かれ少なかれ発生し、そのコストを低く抑えようとするれば当然、アウトソーシングという選択肢が浮上してきている。

電子書籍の市場も、決して国内のみとはかぎらない。アジアの国々に行きよって少し先駆者の書店を覗いてみれば、日本のマンガ、小説、旅行記、ファッション誌などが翻訳されて並んでいる。電子書籍のストアがグローバルに広がれば、海外コンテンツに対する日本国内の需要も一気に増すだろう。

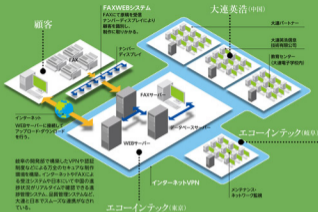
そんななかで、いち早く中国との密接な関係を構築し、アウトソーシングによるシステム開発やDTP制作のスキルを蓄積し続けてきた結果として、知らずとも、そのグローバ

ルな電子書籍ビジネスの最前線ともいえる位置に制作会社として立っているのが、エコーインテックである。

DTP制作のワークフローにシステム開発のノウハウを活用

エコーインテックは、岐阜の情報システム会社のティ・アイ・エス(2009年にエコーインテックと合併)を母体とし、そのオファショア開発部門の日本創設会社として2002年に発足。翌2003年には、中国の大連市に100%子会社「大連英浩(大連英浩信息技术有限公司)」(以降「大連英浩」と略)を設立して、独自のアウトソーシング拠点を構築した。当時、中国へのアウトソーシング

日本と中国の業務を一体化する基盤システム



は、データ入力、切り抜き、トレース、脚取り図作成といった比較的単純な作業が大半を占める。エコーインテックもこの脚取り図作成を足踏かりにDTPの分野へと第一歩を踏み出す。ただしその際、労働力の安さに任せて失敗できなかったのは、専用のシステムを開発し、トラブルの低減や納期の短縮に努めたという。「FAXWEB」と名付けられたこのシステムでは、脚取り図の原稿を開発部門のFAXで受け取り、画像化して所定の場所にアップロードする。と同時に、FAX番号から割り出した発注者へは受発メールを、大連英浩の制作部へは受発メールを送信する。その後、脚取り図が完成して大連英浩から所定の場所にアップロー

ドされると、今度はそれを納品先のサーバーへと転送し、発注者へは完成通知メールを送信する。こうした自動化に加え、日本語のできないオペレーターでも日本語で発注者への問い合わせや依頼のメールを送るという、十数種類の定型文による自動返信の仕組みなどを講じた結果、ミスやトラブルは激減。現在では24時間365日の受注で月量3万件というスループットを実現している。

高い日本語能力が支える正統かつ迅速な日本語組版

脚取り図作成のビジネスを軌道に乗せたエコーインテックは、組版の

分野へとさらに歩を進める。しかし、日本語を組むからには、組版自体の技術に加え、日本語を正しく理解する力を備えていなければならない。

そこで同社では、日本語能力試験の上級合格者を中心に、日本語に堪能な人材を積極的に採用してスタッフを構成。そのなかでも特に優秀で、特に、事業の中核を担うような人材には、数ヶ月〜1年にわたる長期出張・転勤という形で東京や岐阜で研修を行っている。日本語を扱う仕事なのだから、日本の文化や習慣を身につけるのは当然だという。さらに営業マンに同行させ、クライアントからの要求やクレーム処理など、日本での印刷販売ビジネスの実態までを、実際に学ばせている。

